

「2 + 2 編入留学生」の 教室外における 日本語使用の実態調査

北陸大学国際交流センター准教授
横田 隆志

1. はじめに

2003年に日本国内の留学生の数は10万人を突破し、2008年には新たに「留学生30万人計画」^{※1}が発表された。北陸大学でも留学生数は2009年4月には過去最高の約700人^{※2}となった。そのうちの大部分を占めているのは「2 + 2 編入留学生」^{※3}で、3年生には173人、4年生には153人が在籍している。彼らが受講している日本語の科目には「日本事情」、「読解」、「聴解」、「作文」、「会話」^{※4}などがある。これらの科目はレベル別のクラス編成をしており、留学生が自分のレベルに合った授業を受けられ、総合的な日本語運用能力を身につけられるように構成されている。しかし、日本語の運用能力は授業の中だけで身につくものではなく、教室外での言語接触でも日本語の運用能力を高めることができる。また、留学の醍醐味として、日々の生活の中で日本語母語話者と言語接触ができることがあり、生活を通して日本語を身につける機会の可能性は無限大にあり、それを期待して留学をする学生も少なくはないだろう。

しかしながら、留学生から「アルバイトがない」、「日本人の友人ができない」という声を聞くことがある。また、アルバイトはしているが、そこで日本語を使わない学生やどのように話しかけたらいいのか分からず、話が続かないということも聞いたことがある。さらに、日本人と日本語を使用して会話をする機会が多いが、いつも同じような話で「おしゃべりはするが日常的な会話だけで難しい話をする機会がない」と言っている留学生も存在している。日本語の教員はすべての留学生の日本語に関わる問題や情報を把握しているのが望ましいとされている。しかし、留学生の数が多くなるに従って、日本語教員が全ての学生と話す機会が少なくなってきていて、留学生個々の問題や情報について知る機会が限定されているように思われる。そこで、教室活動では見えづらい教室外の日本語使用についての調査を行い、日本語の使用に関する実態を把握する必要があると考えた。

※1：「グローバル戦略」の一環として日本が2020年を目途に留学生を30万人受け入れる計画。その中には留学生が留学後困らないよう、日本語教育機関・大学等の日本語教育担当部署をはじめとした国内の日本語教育の充実も挙げられている。

※2：2009年4月1日の入学予定者。

※3：中国の大学12校と提携を結び、中国の大学で2年間の日本語教育を行ったあと、北陸大学に来て更に2年間の専門教育を行い両方の大学の学位を取得できるプログラム。

※4：北陸大学のカリキュラムでは「日本事情」「日本語 I」「日本語演習 I」などの科目名になっている。

2. 先行研究

従来、日本語教育では教室内の学習や教育方法を中心として議論が進められていた。しかし、日本語学習をより大きな視点から捉え、教室外での日本語の使用も日本語学習の一つとして考えられ、教室外で上手にコミュニケーションがとれるような教育が教室での学習に用いられるようになった。つまり、「日本語学習の場」と考えられる範囲が拡大されているのである(二通 2006)。これにより、教室内活動は教室外でのコミュニケーションに役立てるために行うために行われるものと考えられるようになり、教室外での日本語の習得をも考慮しながら教室内の学習は計画されなければならなくなった(内海・吉野 1999)。また、ネウストプニー(1982)が教室内での言語教育を「できる限り学習者がそのことばを使える実際のコミュニケーション場面と結びつけること」、「そのことばが使われている社会とのコミュニケーションを増やすこと」と述べているように、教室内での学習だけではなく、社会とのコミュニケーションの機会を増やすことも教室内の日本語学習の役割であると考えられてきてきた。そのために、日本語教育では学習者の学習環境やネットワークの構築、言語接触などに関心が高まっていて、その調査から教室内活動を見直す研究も多くなってきている。^{※5}

その中の一つとして、日本語学習者の教室内、外での日本語の使用実態の調査がある。東海大学では「東海大学留学生日本語実態調査プロジェクト」で、学部留学生の接触場面の調査、接触場面での問題、接触場面の問題に対する対応の調査を行ったが、調査対象が9名という非常に少ない人数であった。また、黒野(2006)は、東京家政学院筑波女子大学^{※6}の留学生に日常生活や大学生活において必要とされる日本語使用についての質問紙調査とインタビュー調査を行った。しかし、この調査は大学内外の全ての場面での日本語の使用に関しての調査であり、教室外に注目して行った研究ではなかった。更に、留学生を対象としたネットワーク調査では、内海・吉野(1999)、加藤・谷部(1997)、朴(2004)などがあるが、いずれも少数の短期留学生のネットワーク構築に関する研究である。

そこで本調査では北陸大学の留学生が教室外でどのくらい日本語を使用しているかということに焦点を当て、多くの留学生を対象に調査を行った。

3. 調査概要

3.1. 調査目的

調査目的は北陸大学の留学生が教室外でどのくらい日本語を使用しているかを明らかにすることである。そのために本大学の大部分を占める「2+2編入留学生」が大学内、大学外でどのくらい日本語を使用していて、それに対しどのように感じているのかを調査した。

3.2. 調査対象者

北陸大学「2+2編入留学生」の3年生173名に対して質問紙調査を行った(回収率69%)。調査対象者は120名だったが、回答の信頼性に欠ける12名を除外した108名を分析対象者とした。

※5：日本語を教えるという教師の問題や教育方法の問題ではなく、日本語を学習する学習者を中心として、学習する個々の学習者がどのような人物で、どのように生活をしているかなどを調査しそれを教育に生かしていく研究。

※6：2005年から「東京家政学院筑波女子大学・同短期大学部」を改組・改称し、男女共学の「筑波学院大学」となった。

3.3. 調査期間

来日後すぐの時期は接触場面が限られてしまっている場合が多い。そこで本調査では日本での生活に慣れた来日1年後の調査を行う。しかし、本大学では2月、3月が春季休業となるために春季休業の直前の1月に調査を行った。

3.4. 調査手続き

所属する北陸大学の「日本事情Ⅲ」*7の授業の後、手渡しし、質問紙への回答を依頼した。依頼の際は研究の目的を述べ、プライバシーが保護されることを説明した。

3.5. 調査項目

学習環境とは、学習者が会って話をする、直に見る、あるいは電話やメールでやりとりをするなどの目に見える接触が行われているものを指す(浜田他 2006)。しかし、本調査では日本語使用について、学習者が日本語を「話す場面」について限定し、更に直接会って話す場面での使用について調査を行った。そのため電話やメールでの接触は対象としなかった。また、接触場面は、一般的には会話の参加者に母語話者と日母語話者が存在する場面を表すが、本調査では日本語の使用調査であるために非母語話者同士が日本語を使用する場面も調査の対象とした。

質問紙は大きく分けて、(1)大学内での授業以外の日本語使用についての調査、(2)大学外の日本語使用についての調査、(3)日本語の使用時間と日本語使用に対する満足度についての調査の3つの部分から成る。

4. 結果

4.1. 大学内での日本語使用について

大学内での授業以外の日本語使用については、「母語の使用について」、「サークル等に所属しているか」、また、「大学内に日本語を使用して交流をしている人がいるか」を調査した。

まず、母語の使用についてだが、教員や職員に対して母語を使用することがあるかどうかという質問に対しては、使用したことがあると答えた留学生は52人、使用したことがないと答えた留学生は53人、未回答が3人だった。その理由としては、「中国語ができる先生や職員が多いから」、「中国人の職員がいるから」、「自分の日本語が下手なので母語で話してしまう」、「複雑な問題があるときには中国語で話したほうが分かりやすいから」というような回答が目立った。実際に、日本語に問題があるために中国語を話してしまう場合と中国語を母語とする人に日本語で話しかける不自然さという2つの理由があった。約半数の留学生が中国語を使用するというデータからみると、中国語が理解できるスタッフがいることは学生サービスの面からみると充実したサービスではあるが、問題があるときに安易に母語を使用してしまい、日本語学習という面からみると学習の機会を奪っていることにもなる可能性があるのではないだろうか。

次にサークル等の加入については19人がサークル等に加入していて、全体の17%である。この数字は決して多いとは言えない数字である。これはアルバイトをしている学生が多く、授業後にサークル等の活動に参加することが難しいからであろう。

*7：「日本事情Ⅲ」は2+2編入留学生はほぼ受講すること、3つのクラスに分かれていて比較的調査を行いやすいことから「日本事情Ⅲ」の授業後に質問紙調査を実施した。

また、大学内で定期的に日本語を使って話す人がいるかどうかという調査では、21人が「はい」と答えていて、残りの87人は日本語を使って交流していないという結果になった。サークル等に参加している学生はサークルの中で日本人学生との交流はあるようだが、80%以上の学生が大学内で授業以外では日本人学生との交流がないことが分かった。授業以外で大学内では日本語を使用する機会があるのはサークル等の活動でゼミや授業での日本語での交流が教室外では存続していないようである。

4.2. 大学外での日本語使用について

大学外での日本語の使用については、「アルバイトをしているかどうか」、「そこで日本語を使用する機会はあるか」、また、「日本語使って話をする人物がいるかどうか」について調査した。

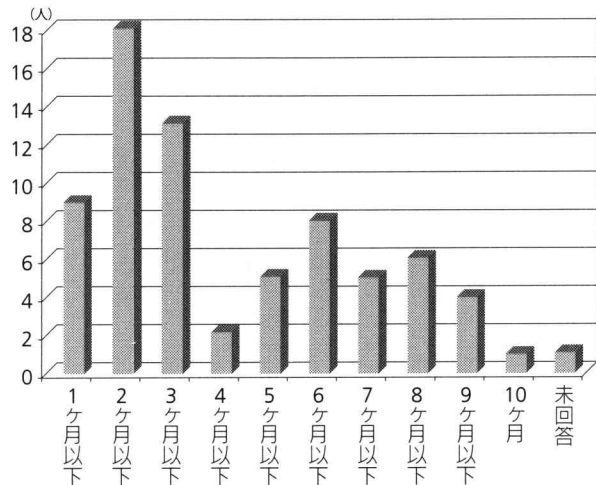
まず、アルバイトをしていると答えた人は71人、していないと答えた人は35人、未回答が2人だった。アルバイトをしていると答えた学生は全体の約65%で、これは李(2006)で述べられているアルバイトをしている留学生数と比較するとやや少なくなったようである。しかし、約半数以上の留学生が「アルバイトをしている」、または、「過去にしたことがある」と答えていることから、大学

外での日本語を使用する機会を持っている学生は大学内と比較して多いことが分かる。また、アルバイト先で日本語を話す人の年齢はばらつきがあり、10代から60代とかなり広い範囲の人と日本語を使用して会話を行うことができることが明らかになった。しかし、実際にアルバイトをしている期間は2カ月以下が多く、3か月以下と答えた学生は約56%と過半数を超えている。来日後、約10カ月目の調査だったが、半年を過ぎたころからアルバイトをし始めている留学生が多い(図1)。また、アルバイトをしていると答えた留学生のアルバイトの種類については、図2のように「飲食業」「サービス業」「派遣」という回答が多かった。

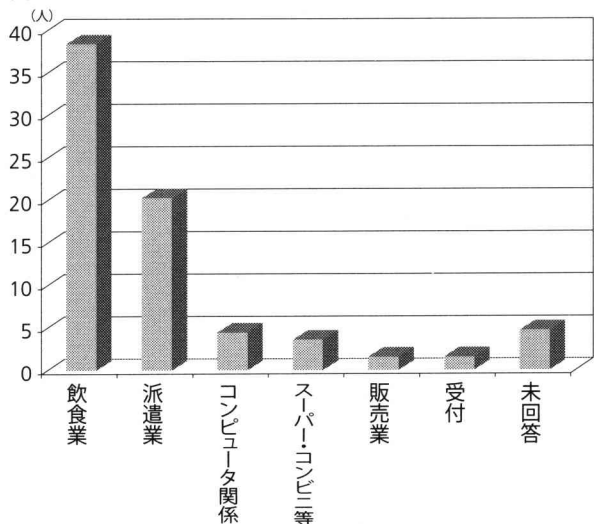
しかし、アルバイトをしている留学生の数が71人に対して、「アルバイトで定期的に日本語を話さない」と答えた留学生が14人もいた。これは、アルバイトをしていてもそこで日本語を使って話す機会がない留学生もいるということである。

また、大学外のアルバイト以外で、定期的に日本語を話す人がいるかどうかという調査では、8名の留学生は定期的に

【図1】 「アルバイトをしている/した期間」



【図2】 「アルバイトの種類」



日本語を話す友人がいると答えていた。しかし、残りの100名は日本語を話す友人がいないということが明らかになった。

4.3. 日本語使用の時間と満足度について

大学内、大学外で授業以外に日本語をどのくらい使用しているかという調査を「一日当たり」と「一週間当たり」という2つの点から調査をした。これは、授業がある月曜日から金曜日までと週末に日本語の使用にばらつきがあるのではないかと思い、2つの点から調査を行った。図3が一日に日本語を話す時間であり、図4が一週間に日本語を話す時間である。

一日に日本語を話す時間で最も多いのは1時間以下であった。しかし、平均すると授業以外では日本語を全く使用しないという留学生が13人もいることが分かった。また、一週間で考えると日本語を使用する時間は10時間以下が多く、全く話さないという留学生が11人もいることが明らかになった。

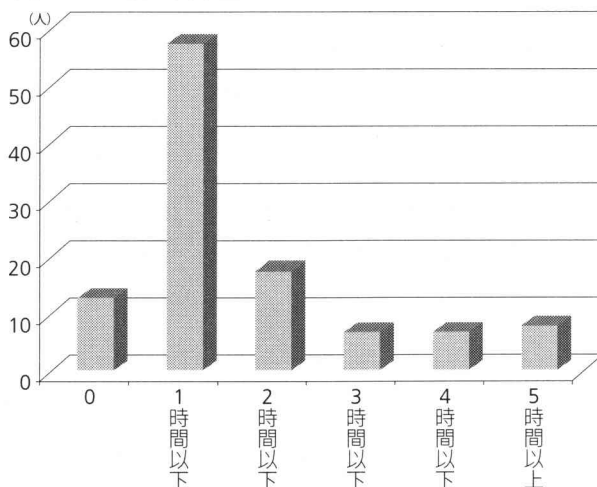
現在の日本語の使用に関する意識調査では満足しているが1人、やや満足しているが7人、あまり満足していないが46人、満足していないが54人という結果になった。非常に多くの留学生が現在の日本語使用に不満を持っていることが明らかになった(図5)。

5. まとめ

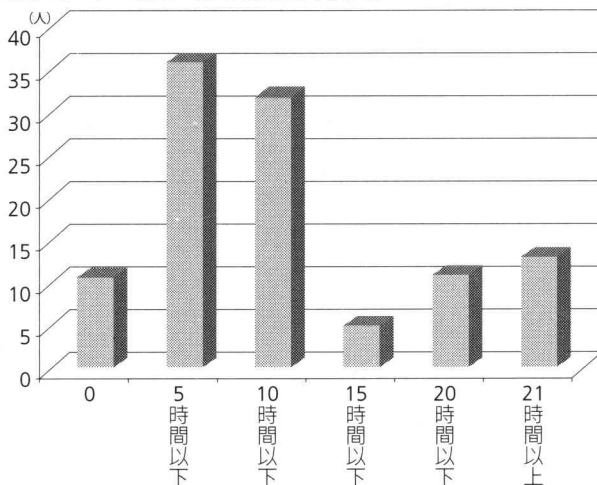
本研究では、質問紙調査により北陸大学の「2+2編入留学生」の日本語使用実態を調査した。教室外での日本語使用について明らかになった点をまとめる。

- 1) 大学での教室以外での日本語の使用についてはサークルなどの活動の場

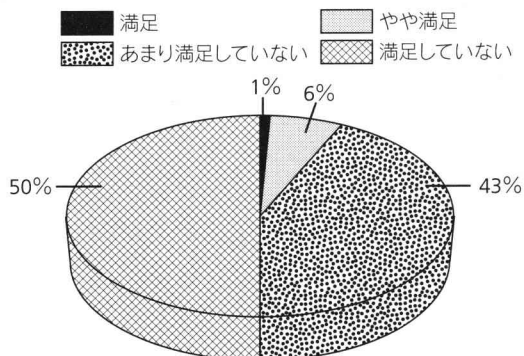
【図3】 「一日に日本語を話す時間」



【図4】 「一週間に日本語を話す時間」



【図5】 「日本語の使用に関する意識調査」



で多い。授業に関係することで日本人学生との接触場面はほとんどない。また、問題があった時に母語を使用して問題を解決できる環境が存在している。

2) 大学外での日本語の使用はアルバイトでの知人、友人に対してが多い。しかし、アルバイトをしていても日本語で交流することがない留学生もいる。アルバイト以外で日本語で交流をする人はほとんどいない。

3) 一日に日本語を話す時間、一週間に日本語を話す時間に対して不満を感じている留学生が多い。

今回の調査を通じて、留学生の日本語使用状況を知ることができた。教室外での日本語使用の時間は筆者が想像していた時間よりも非常に短かった。また、授業以外で日本語を使って話をする機会がほとんどない留学生もいる。これは笠原・張(2006)でも述べられているように、日本に来る前のほうが日本人との交流があったという留学生も決して少なくはないように思える。また、現在の日本語使用状況に不満を感じている留学生が全体の90%以上いることは何らかの改善策を考えなくてはならないだろう。

しかし、今回の調査では、学習環境に問題があるのか。それとも個人のコミュニケーション能力に問題があるのかは調査することができなかった。今後の課題として、教室外での日本語使用が少ない原因を探り、問題点を明らかにする必要がある。そして、更にそれを教育にどのように取り入れていくかを検討する必要がある。

参考文献

- 内海由美子・吉野文(1999)「短期留学生の日本語実際場面の実態と分析－ネットワークの観点から－」『千葉大学留学生センター紀要』5 千葉大学留学生センター
- 加藤好崇(2002)「東海大学学部留学生日本語使用実態調査プロジェクト：中間報告(第1部)：概要」『東海大学留学生センター紀要』22 東海大学留学生センター
- 加藤清方・谷部弘子(1997)「短期留学生の学習ネットワーク」『平成8年文化庁日本語教育研究委嘱 国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究－最終報告書－』日本語教育学会
- 張後貴・笠原祥士郎(2006)「北陸大学の日本語教育の現状と問題点およびその改善策について」『北陸大学紀要』第30号 北陸大学
- 二通信子(2006)「国内の日本語学習の広がり」『日本語教育の新たな文脈』アルク
- ネウストブニー、J.V.(1982)『外国人とのコミュニケーション』岩波書店
- 浜田麻里(2006)「学習環境と日本語学習支援」『2006年度日本語教育学会第4回研究集会報告書』日本語教育学会
- 浜田麻里他(2006)「日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐって」『日本語教育の新たな文脈』アルク
- 朴金秋(2004)「状況的学習論から見る東アジア留学生のネットワークの構築」『留学生教育』第9号 留学生教育学会
- 文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省(2008)「『留学生30万人計画』骨子」(2008.7.29)未刊公資料
- 李曉燕(2006)「2+2編入留学生が日本社会に適応するためには」『北陸大学紀要』第30号 北陸大学

《今回の調査で使用した質問紙》

留学生の日本語使用に関するアンケート調査

このアンケートは日本語の使用に関する調査のために実施するものです。このアンケートの結果が研究や教育以外の目的で使用されることはありませんので、ご協力をお願いします。

- ・学年、性別、留学の種類について教えてください。

_____年 男・女 2+2編入・3年次編入・学部留学・その他()

- ・大学の授業外での日本語の使用について教えてください。

- 1 教員や職員に対して日本語ではなく母語を使用する時がありますか。

はい・いいえ

- 2 はいと答えた人に質問します。どんな時に使いますか。またどうして日本語を使いませんか。

- 3 サークル活動や部活動に参加していますか。

はい・いいえ

- 4 授業以外で定期的に日本を使って話をする人はいますか。

はい・いいえ

- 5 はいと答えた人に質問します。誰とどんな話題について話をしますか。

例 サークルの友人(男性) 恋について

クラスメイト(女性) 研究について

- ・大学外での日本語の使用について教えてください。

- 1 日本でアルバイトをした経験がありますか。

はい・いいえ

(はいと答えた人は2～5も教えてください。いいえと答えた人は6へ進んでください)

- 2 どのくらいの期間アルバイトをしていますか。(していましたか)

例 2か月(2009年11月から現在)・3か月(2009年6月から8月)

- 3 アルバイトの種類はどのようなものですか。

4 アルバイトで定期的に日本語を話すことがありますか。

はい・いいえ

5 はいと答えた人に質問します。誰とどんな話題について話をしますか。

例 20代 大学生(男性)日常会話

50代 アルバイト店員(女性)就職について

6 定期的に日本語を話す友人がいますか。

はい・いいえ

7 はいと答えた人に質問します。誰とどんな話題について話をしますか。

例 60代くらい 近所のおじさん(男性) 政治について

・授業以外での日本語の使用について

1 一日に日本語を話す時間はどのくらいですか。

約_____時間

2 一週間に日本語を話す時間はどのくらいですか。

約_____時間

3 現在の日本語の使用に満足していますか。

満足している・やや満足している・あまり満足していない・満足していない

4 理由を教えてください。

5 どのような日本語の使用が理想ですか。

(例 一人の会話のパートナーが欲しい)

ご協力ありがとうございました。